シリーズ vol.19
すこやかライフナビ

百日咳（ひゃくにちぜき）が流行

「コンコン！コンコン！」

かぜが治った後も咳がなかなか止まりそうにない・・・。

この数年、百日咳が流行して問題になっています。小さな子どもだけでなく、大人がかかる場合が増えています。

百日咳は、百日咳菌が咳やくしゃみで飛び散ることによってうつる病気です。最初は普通のかぜのような症状から、だんだんと咳き込みがひどくなり、ヒューヒュー音を出しながら息を吸うようになります。赤ちゃんがかかると、咳のために息ができず、唇が青くなってチアノーゼという状態になったり、けいれんが起きたり、脳症で重い後遺症を起こすことのある病気です。

百日咳は三種混合（ジフテリア・百日咳・破傷風）ワクチンの接種が普及して減少しましたが、ワクチンを接種してから何十年も経って免疫が下がっていたり、未接種のまま免疫がない状態でいたりするとかかる場合があります。大人が百日咳にかかって治療を受けないままでいると、まだ予防接種を受けていない赤ちゃんや子どもにうつしてしまう恐れがあります。大人の場合は、特徴的な咳がみられないこともあるので、百日咳と気づかないこともあるようです。咳が良くならないときは、熱がなくても医療機関で受診することが大事です。

市では、生後3か月以上7歳6か月未満のお子さんに三種混合の個別予防接種を無料で実施していますので、必要な回数を接種し、百日咳に対する免疫をつけておきましょう。

三種混合ワクチンは、1期初回の3回と追加接種として1回の合計4回を、7歳6か月までに接種します。接種は皮膚のしこりを予防するために、左右交互に行います。1期初回の1回目から2回目、2回目から3回目の間隔は56日を越えないように注意しましょう。もし、特に理由がなく、間隔が56日を過ぎてしまったときは、市で助成する制度がありますのでお問い合わせください。

追加接種は3回目の接種をした日から、1年から1年6か月の間隔をあけて受けるのが標準的な受け方です。追加接種を受ける間隔が1年6か月を過ぎてしまっても7歳6か月までに受けましょう。

三種混合ワクチンを接種する前に血液検査を受けて百日咳とわかった人は、百日咳ワクチンを含んでいない二種混合トキソイド（ジフテリア・破傷風）で、初回2回接種と、1回追加接種を無料で受けることができます。また、症状などにより百日咳と診断されても、血液検査を受けていない場合は、明らかにかかったとは考えずに三種混合ワクチンで決められた回数を接種しましょう。（平成20年の予防接種実施要領の改正により、百日咳にかかったことがあっても、三種混合ワクチンで接種しても差し支えありません）

予防接種を受けるときは、必ず配付された説明書を読み、予防接種の効果と副反応についてよく理解しておくこと、お子さんの体調が良いときに受けることがとても大切です。

三種混合ワクチンの副反応として、接種した部位の発赤・腫れ・しこりが最も多くみられますが、ほとんどは数日で治ります。接種後の発熱も見られることがありますが、接種後1～2日がピークで下がってきます。機嫌が悪いときや腫れがひどいときはかかりつけの医師にご相談ください。

予防接種の副反応で、医療費がかかった場合や万が一の後遺症などについては国が健康被害の救済を行っています。

問 健康支援課保険予防係 ☎0479(80)8383

健康支援課看護師
佐川能子（よしこ）さん

早期から妊婦検診

市では平成21年4月1日から、妊婦一般健康診査の公費負担を5回から14回に拡大しました。県内の医療機関（助産院含む）で利用できますが、県外の医療機関では、事前に市との契約手続きが必要です。

これから出産予定で、まだ交換していない人はご連絡ください。

妊娠は初期にトラブルが起こりやすいので、受診は早い方が安心です。しかし、人によっては妊娠に特徴的な兆候がみられず、気づくのが遅い人もいます。

生理はストレスなど色々な原因で遅れることもありますが、思わぬ病気が隠れていることもあります。生理不順の人も基礎体温をつけるなど自己健康管理とともに、妊娠の可能性がないか受診しましょう。

問 健康支援課 母子保健係 ☎0479(80)8384

☎／市外局番の記載のないものは『0475』です